慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本および関係国のナショナル・イメージについての世代別検討
Sub Title	National images of Japan and its related countries in some Japanese generations' minds
Author	大坪, 寛子(Otsubo, Hiroko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2011
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.16 (2011. 7) ,p.52- 72
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20110709-0052

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本および関係国のナショナル・イメージについての世代別検討

National images of Japan and its related countries in some Japanese generations' minds

大坪 寛子

１．問題設定

本研究は、日本在住の市民が抱く日本および関係国についてのナショナル・イメージの構造を、量的分析手法を用いて世代別に比較・検討したものである。今日、グローバル化の進展により、国境を越えて大量の人、モノ、資本、情報が行き交い、トランスナショナルな文化が日常生活に深く浸透している時代となったが、人々が心理的に構成する、国民国家という枠組みに基づいたナショナル・イメージが影響力を失ったわけではない。たとえば藤田（2008）が日本の中間層の多くの若者が電子メディアの形成するイメージに導かれて文化的活動や英会話の学習のために国際移動を行っていることを報告しているように、海外諸国のイメージは一般の市民や学生の国際移動の動機形成に影響を与え、行動を促す。国境を越えた移動が以前にも増して物理的にも心理的にも容易になった今、その影響力は増大しているとも言える。

ここで言う「イメージ」とは、「個人の認知システムにおけるある対象についての組織化された表象」（Kelman 1965：24）とする。つまり、その対象がどのようなものであるかということについての個人が持つ概念であり、ここには態度、意見、偏見、ステレオタイプといったすべての態度変数とすべての知識が含まれる（御堂岡、1990）。またここで「ナショナル・イメージ」とは、国家とその国民についてのイメージを指すものとする。

本研究では個人の集合体としての「世代」という概念に注目して検討を行った。人間の高度の心的形成物は歴史的産物であるとしたディルタイは、「世代」を諸個人が同時代的な関係にあることを示す指標であるとし、「ある世代とは諸個人の形成する比較的狭い集団のことであり、これらの個人は、多感な時期に起こった同一の大きな事実や変化に左右され、それ以外の要因が異なっていても、一つの等質的な全体に結びつけられているのである」（ディルタイ 1875＝2006：558）と述べた。このように、「世代」とは共通の態度や行動のセットと共通の集団意識をもって他の世代から区別される集団であり、「年齢層」や出生コーホートよりも、よりまとまりのある集団として捉えられるものとされる（綿貫、1994）。社会的出来事の記憶でも、青年期に経験した出来事の記憶が特に鮮明であることを調査結果に基づいて小城他（2010）が報告しているように、感受性の鋭い青年期にどのような歴史的事実を経験したかということは、生涯にわたって影響を及ぼすものと考えられる。現在抱いている日本および関係国のイメージについても、それは反映されると考え、世代別に検討を行うことにした。

世代の幅は、綿貫（1994）の言うように、任意に設定されるのではなく、実証的根拠に基づ

大坪寛子「日本および関係国のナショナル・イメージについての世代別検討」
『三田社会学』第 16 号（2011 年 7 月）52 - 72 頁

いて推定されるものである。これについては幸いなことに河野（2008；2010）の研究があり、本研究ではその結果を利用した。河野は、1973 年から 2008 年までの 35 年間に 5 年ごとに行われてきた NHK「日本人の意識調査」のデータに基づき、回答者の生年を 5 年きざみにした各生年コーホートの類似性の高い群をまとめ、現代の日本人を 6 つの世代、すなわち「戦争世代」（生年が 1928 年以前）、「第一戦後世代」（1929 年から 1943 年）、「団塊世代」（1944 年から 1953 年）、「新人類世代」（1954 年から 1968 年）、「団塊ジュニア世代」（1969 年から 1983 年）、「新人類ジュニア世代」（1984 年以降）に区分した。この区分は、投票行動との関連で現代日本の有権者を分類した綿貫（1994）とも一致する。河野（2008；2010）によると、日本人の意識は「伝統志向－伝統離脱」の次元と「あそび志向－まじめ志向」の次元の 2 次元構造で捉えられ、各世代の意識は、時代の変化とともに多少は変化しつつも、35 年が経過してもなお「世代」としての一定のまとまりを保ち続けているという。

日本や外国のイメージを検討した研究は数多く存在する。かつてはこうしたイメージの内容を明らかにする研究が中心を占めており、我妻・米山（1967）の結果からは、当時の日本人が抱いていた先進的な欧米諸国へのあこがれと後進的なアジア諸国への蔑みが読み取れる。近年の傾向としては、オリンピックなどの国際イベントの開催に合わせて、イメージの測定とともにそれを規定する要因を検討したものが多い。典型的にはメディア報道への接触量との関係を検討した研究であり、接触量が好意的イメージや類似性イメージを上昇させたことを報告したものや（向田他、2007）、逆に低下させたり一般市民では変化が見られなかったことを報告したもの（向田他、2005；村田他、2005）、また、変化には持続性がなかったことを報告したものもある（Sakamoto et al, 1999；向田他、2001；上瀬、2004；上瀬他、2010）。また、愛国心やナショナリズムが一定の影響力があることを報告したものもある（たとえば村田他、2005）。国際イベント以外のメディア接触の影響を検討したものもあり（たとえば大坪、2004）、近年では急激に増加した韓国ドラマや韓国映画の視聴がもたらす韓国（人）イメージへの影響を検討し、それほど明確な結果が得られなかったことを報告したものもある（たとえば向田他、2008；李他、2010）。本研究でも、こうした要因を含め、ナショナル・イメージを規定する要因を探索的に検討した。

ナショナル・イメージが想起または形成されるときとは、「想像の共同体」（Anderson, 1983＝1997）である国家の枠組み、つまり国家という社会的カテゴリーが人々の意識の中で顕在化するときである。ある社会的なカテゴリーが意識されたときの個人の認知傾向については、社会的アイデンティティ理論（Tajfel & Turner, 1979）が明らかにしている。それによると、人はある対象をカテゴリーに基づいて分類すると、カテゴリー化自体がもたらす作用として、同じカテゴリーの対象については類似性を、異なるカテゴリーの対象については差異を、過度に認知する傾向がある（Tajfel & Wilkes, 1963）。さらにそのカテゴリーが、自己の所属する集団（自集団＝内集団）とそうでない集団（他者集団＝外集団）とを分かつものであったときには、内集団と外集団の差異を過大視するだけでなく、内集団に対するひいきが生じる。この内集団

へのひいきは、Tajfel et al.（1971）の実験によると、ランダムな振り分けによる集団で、他の成員も不明、かつ外集団との利害関係もまったくない条件（「最小条件集団」）でも生じることが確認されている。これは、個人が自己の自尊心を高揚させるために、自己の所属する集団をひいきすることで肯定的な社会的アイデンティティを獲得しようとする動機で説明されているが、これによると、国家という社会的カテゴリーが顕在化するような場面では、人は「自国」という内集団と「外国」という外集団とに分け、両集団の対比がより明白となるように差異を過度に認知し、自集団を肯定的に評価する認知傾向が生じるということになる。こうした人間の認知傾向を踏まえ、本研究では関係国のイメージは日本イメージとの対比で解釈することを試みた。この日本イメージとの対比という点と世代別の検討という２点が、同じデータを使って同様に国家や国民のイメージを詳細に検討した渋谷他（2011）と本研究との違いである。

２．研究方法

（１）調査実施時期と対象者

本研究では、萩原らが 2010 年２月にネットリサーチ社のモニターを対象に実施したウェブ調査で得られたデータを使用した。この調査は、筆者も所属する共同研究プロジェクト「記憶の共有と風化―テレビの社会的役割の変化」（慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所、代表萩原滋[1)]）が実施したものである。全国４地域（関東、関西、東北、中国・四国）在住の 10 代（15 歳以上）から 60 代の男女 1600 名を対象としており、各地域に 400 名ずつ、６つの年代で男女が均等になるように割付を行っている。詳細については萩原他（2011）を参照されたい。

（２）イメージの測定

国家という社会的カテゴリーで区分された内集団である日本と、関係性の強い外集団であるアメリカ、韓国、中国、そして比較のために加えた比較的疎遠な外集団としてケニアと北朝鮮について、国家としてのイメージ（以下「国家イメージ」とする）と、その国民に対するイメージ（以下「国民イメージ」とする）を、該当すると思われる形容詞的表現（表２および図１・図２参照）の選択を複数回答形式で求めることによって測定した。ただし、学校教育で得る知識でも回答可能な「国家イメージ」に対し、「国民イメージ」の回答にはより具体的な経験を必要とすると思われたため、疎遠な２国についての「国民イメージ」は測定していない。参考として「アフリカ人」を設定して測定した。

（３）分析方法

結果の分析には次の４つの方法を用いた。まず、「国家イメージ」「国民イメージ」とも、設定した個々の項目ごとに世代別単純集計結果を出し、世代間の差をカイ二乗検定と残差分析を使って検討した。次に、その結果を集約し、全体的なイメージ構造として平面上に図示するた

め、数量化Ⅲ類を使った。続いて両次元のサンプルスコアを算出し、一元配置の分散分析を行って世代別平均値の差の検定を行った。最後に、この世代別平均値を従属変数として重回帰分析（ステップワイズ法）を行い、「国家イメージ」と「国民イメージ」を規定する要因を探索的に検討した。

（4）設定した変数

「世代」については、前述したように河野（2008；2010）に従って「戦争世代」から「新人類ジュニア世代」までの６つの世代区分を用いた。各世代の調査実施時の前年（2009 年）12 月 31 日現在の満年齢を算出し、回答者を分類した。「戦争世代」は本調査対象者には含まれない。「団塊世代」と「第一戦後世代」は他の世代に比べて少なかったので、ここではこの２世代を併せて「第一戦後・団塊世代」として分析することにした。回答者の世代別構成を表１に示す。

各世代の「国家イメージ」と「国民イメージ」を規定する要因を探索的に検討するための重回帰分析では、説明変数として、デモグラフィック変数の他、直接接触経験を測定する変数、メディア接触変数、愛国心関連変数、態度変数を設定した。メディア接触はテレビに限定して多くの変数を設定したが、多重共線性の問題を排除するために変数間の相関係数が $|r|>0.3$ で有意なものは、原則としてその中の一つの変数のみを分析に用いた。最終的に投入したのは 19 変数で、表２に示したとおりである。

表1　回答者の世代別構成

	団塊・第一戦後		新人類	団塊ジュニア	新人類ジュニア
	第一戦後	団塊			
生年 年齢*	1929年～1943年 66歳以上	1944年～1953年 56歳～65歳	1954年～1968年 41歳～55歳	1969年～1983年 26歳～40歳	1984年～ 25歳以下
男性	31（59.6%）	142（47.5%）	212（50.8%）	220（48.0%）	195（52.1%）
女性	21（40.1%）	157（52.5%）	205（49.2%）	238（52.0%）	179（47.9%）
計	52　（100%）	299　（100%）	417（100%）	458（100%）	374（100%）
	351(100%)				

＊　2009年12月31日現在の満年齢

表２　重回帰分析での説明変数

	性別
	学歴
○	愛国心
	ナショナリズム
	異文化接触志向
	直接接触経験（欧米系人）
	直接接触経験（アジア系人）
	米国への好意度
	米国への嫌悪度
	韓国への好意度
	韓国への嫌悪度
	中国への好意度
	中国への嫌悪度
	テレビ愛着度
	ニュース視聴頻度
	外国関連娯楽番組視聴経験度
	米国旧ドラマ視聴経験
	米国中期ドラマ視聴経験
○	米国新ドラマ視聴経験
	米国新ドラマ再視聴希望
	アメリカドラマ視聴頻度
	米国旧ドラマ再視聴希望
	米国中期ドラマ再視聴希望
	韓国ドラマ視聴経験度
	韓国ドラマ再視聴希望度
○	韓国ドラマ視聴頻度

＊ 枠内は相関関係が強く、分析には○印のもののみ投入。

３．分析結果

設定した国についての 14 項目の「国家イメージ」、そして 20 項目の「国民イメージ」（北朝鮮・ケニアは設定なし。参考として「アフリカ人イメージ」）を世代別にクロス集計し、カイ二乗検定を行うと、多くの項目で有意差が見られた。主な結果を表３に示す。有意差のあった項目は残差分析を行い、期待度数よりも有意に度数が多かった、または少なかったものについても表（%表示）に示した。この結果については、以下の説明の中で必要に応じて言及する。

表3　世代別「国家イメージ」および「国民イメージ」選択率（%）

		世代間有意差	第一戦後・団塊		新人類		団塊ジュニア		新人類ジュニア	
アメリカ	自由な	***	70.9		**77.2**	**	65.3		**52.9**	**
	先進的な	#	**65.2**	*	62.6		57.4		57.2	
	信頼できる	***	**25.1**	**	**11.8**	**	14.2		14.7	
	危険な	***	**13.4**	**	**15.3**	*	**24.2**	**	20.9	
	文化が豊か	***	**18.2**	*	**17.3**	**	**26.6**	*	**29.1**	**
韓国	先進的な	**	6.3		**5.8**	*	8.3		**12.6**	**
	歴史が古い	***	**23.9**	**	14.9		**9.8**	**	**11.0**	*
	活力がある	***	**24.2**	**	15.8		15.3		**12.3**	**
	危険な	**	9.4		**7.7**	**	13.5		**15.5**	**
	伝統的	**	**29.6**	*	25.7		**19.9**	*	**19.5**	*
	文化が豊か	***	**19.4**	**	9.8		**7.9**	**	14.4	
中国	強い	***	**31.9**	**	21.3		**16.8**	*	**14.7**	**
	歴史が古い	***	**73.2**	**	**70.7**	**	65.9		**51.9**	**
	活力がある	***	**47.9**	**	37.6		33.2		**22.5**	**
	伝統的	**	**42.7**	**	40.5		36.5		**30.5**	*
	文化が豊か	*	**28.5**	*	26.4		22.7		**19.5**	*
日本	豊かな	***	**29.6**	**	**30.7**	*	**41.3**	**	**40.1**	*
	安全な	***	74.1		**76.3**	**	70.1		**59.1**	**
	自由な	***	**47.6**	**	27.3		**18.6**	**	**20.1**	**
	先進的な	**	**32.8**	*	33.6		39.1		**43.3**	**
	信頼できる	*	52.4		49.6		50.2		**41.7**	**
ケニア	貧しい	**	56.4		52.3		53.1		**43.6**	**
	危険な	#	18.2		15.8		**22.3**	*	16.8	
	弱い	**	**18.2**	**	10.3		12.4		11.5	
北朝鮮	貧しい	***	**72.9**	**	**69.1**	*	66.6		**49.7**	**
	危険な	***	**81.5**	*	78.7		**81.4**	**	**66.0**	**
	弱い	*	18.5		**12.9**	**	**20.7**	*	18.4	
	強い	*	**7.4**	**	4.3		**2.6**	*	3.7	

		世代間有意差	第一戦後・団塊		新人類		団塊ジュニア		新人類ジュニア	
アメリカ人	自己主張が強い		55.3		56.4		**60.7**	*	54.3	
	あたたかい	***	14.0		**8.4**	**	13.3		**20.6**	**
	個人主義	**	62.4		**65.7**	**	60.0		**51.6**	**
	リズム感がよい	***	33.3		**24.5**	**	**38.0**	*	**38.0**	*
	気性が激しい	***	**13.7**	**	**18.5**	*	23.8		**33.2**	**
	論理的	***	**41.6**	**	**34.1**	*	**23.6**	**	**21.7**	**
韓国人	自己主張が強い	**	37.6		40.8		**43.2**	*	**31.6**	**
	礼儀正しい	**	**23.1**	*	**22.8**	*	**15.9**	*	**15.0**	*
	人情に厚い	**	**19.9**	**	14.1		**10.9**	*	12.3	
	感情的	***	**50.1**	**	47.2		45.6		**31.6**	**
	愛国心が強い	***	**64.4**	*	60.2		**62.7**	*	**46.5**	**
	気性が激しい	***	51.0		**55.2**	**	51.1		**35.3**	**
中国人	自己主張が強い	**	50.7		50.8		**55.7**	**	**43.0**	**
	なまけ者	**	12.0		13.7		**20.1**	**	12.0	
	感情的	*	41.9		39.3		**45.6**	**	**34.5**	**
	考えが古い	*	**28.2**	*	30.5		**38.2**	**	35.0	
	自己中心的	***	**45.9**	*	50.6		**59.4**	**	47.9	
	気性が激しい	**	45.3		**42.7**	*	**54.4**	**	44.1	
「アフリカ人」	陽気	**	55.6		56.1		**61.6**	**	**49.5**	**
	人情に厚い	***	**5.4**	**	**7.2**	**	**14.6**	*	**18.2**	**
	なまけ者	***	**33.0**	**	**26.6**	**	19.0		**9.1**	**
	あたたかい	**	19.7		**16.3**	**	**25.5**	*	**25.7**	*
	リズム感がよい	***	70.7		**76.5**	**	69.7		**48.4**	**
	感情的	**	8.8		**7.7**	**	12.0		**15.8**	**
日本人	勤勉	***	**74.9**	**	**71.9**	*	67.0		**55.1**	**
	人情に厚い	***	55.3		**60.7**	**	55.7		**43.3**	**
	あたたかい	*	41.6		42.7		37.6		**33.7**	*
	有能	***	**50.7**	**	47.0		43.4		**32.6**	**
	論理的	***	**21.1**	**	**25.4**	*	**33.6**	*	**38.0**	**
	集団主義	**	**41.6**	*	44.4		**51.3**	*	51.6	

太字大表示は期待度数よりも有意に多かったもの、太字小表記は期待度数よりも有意に少なかったものを表す。
：：*** p＜.001、** p＜.01、* p＜.05、# p＜.1

（1）全体的なイメージ構造

数量化Ⅲ類を使って個々の項目についての結果を集約し、全体を２次元のイメージ構造として図示したものが図１（「国家イメージ」）および図２（「国民イメージ」）である。

1）「国家イメージ」

形容詞的表現が布置された位置から軸（次元）の解釈を行うと、第１軸（横軸）は図の左（負）方向に「信頼できる」「安全な」「豊かな」「先進的な」などの形容詞が、図の右（正）方向に「貧しい」「危険な」が布置されていることから、第１軸は成熟性を表し、左方向に行くほど社会システムの成熟性が高く、右方向に行くほど成熟性が低く未熟なイメージを表していると解釈した。また、第２軸（縦軸）については、図の上（正）方向に「自由な」「強い」「先進的な」などが、図の下（負）方向に「歴史が古い」「伝統的」が布置されていることから、第２軸は変動性を表し、下に行くほど社会システムの過去からの連続性が高くて変化が少なく静態的なイメージを表しており、上に行くほど過去からの連続性が低く変動的で動態的なイメージを表していると解釈した。

この解釈に基づき、各「国家イメージ」が布置された位置を見ると、日本は「文化が豊か」「安全な」「信頼できる」という形容詞と近く、成熟性が高くてやや静態的なイメージである。アメリカは「強い」「先進的な」「自由な」といった形容詞と近く、成熟性が高くて変化に開かれて動態的と捉えられていた。成熟性の次元は日本と有意差はなく、この次元では日本と類似していると捉えられている。中国と韓国はどちらも成熟性は特に高くも低くもなく、やや静態的なイメージであったが、比較すると韓国の方がより成熟的で、中国の方がより静態的と捉えられていた。変動性次元では韓国は日本と有意差がなく、この次元では日本と韓国は類似していると捉えられている。ケニアと北朝鮮は成熟性が低く、特に北朝鮮は顕著で、両国ともやや変動的なイメージであった。

図1 「国家イメージ」

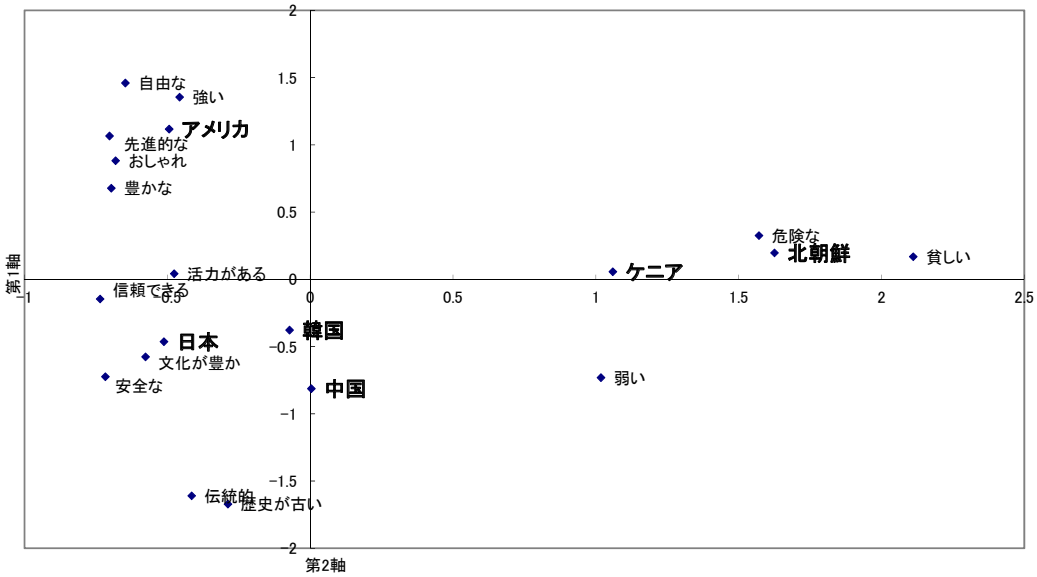
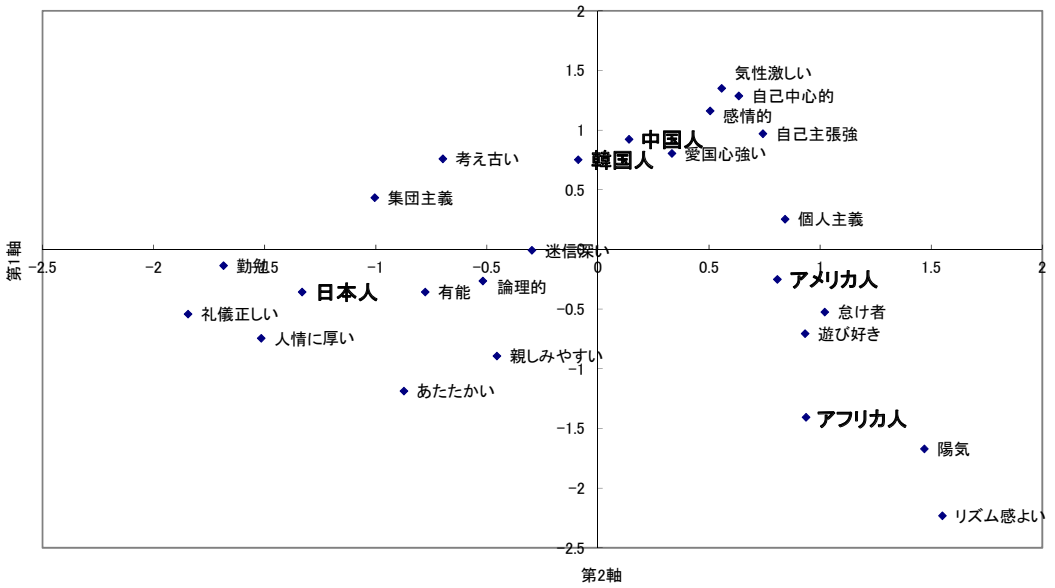


図2 「国民イメージ」



２）「国民イメージ」

「国民イメージ」では、第１軸（横軸）には、左（負）方向に「礼儀正しい」「勤勉」「人情に厚い」などが、右（正）方向に「リズム感がよい」「陽気」「なまけ者」などが布置されたことから、第１軸は自己統制性を表し、左に行くほど自己抑制的で慎み深く、右に行くほど自己解放的なイメージを表していると解釈した。また、第２軸（縦軸）については、上（正）方向に「気性が激しい」「感情的」「自己主張が強い」などが、下（負）方向に「リズム感がよい」「陽気」「あたたかい」などが布置されており、第２軸は情動性を表すもので、上に行くほど感情が激しく攻撃的なイメージ、下に行くほど穏やかで友好的なイメージを表していると解釈した。

この解釈に基づき、各「国民イメージ」が布置された位置を見ると、日本は「人情に厚い」「勤勉」「礼儀正しい」といった形容詞と近く、自己抑制的でやや穏和なイメージが持たれていた。アメリカについては「個人主義」や「怠け者」「遊び好き」といった形容詞と近く、日本人と類似してやや穏和であるけれども、自己統制性の次元は日本人とは対照的で自己解放的なイメージで捉えられていた。中国と韓国は、ともに「愛国心が強い」という形容詞と近く、自己統制性の次元は特に高くも低くもなかったが、情動性の次元は高く激情的と捉えられており、日本イメージとの差異は、いずれの次元でも韓国よりも中国の方が大きかった。アフリカの「国民イメージ」は「陽気」「リズム感がよい」といった形容詞とやや近く、自己解放的で穏和なイメージで捉えられていた。

（２）ナショナル・イメージの世代による差

数量化Ⅲ類によって算出されたサンプルスコアを利用して、「国家イメージ」および「国民イメージ」の世代別平均値を出し、それらを平面上に布置するとともに（図３および図４）、一元配置の分散分析によって差の検定を行った。

全体的なイメージ構造は全世代で類似しており、世代にかかわりなく共有されていた。しかし、世代別に見てみると、「国家イメージ」にせよ「国民イメージ」にせよ、「新人類ジュニア世代」は他の世代に比べて国によるイメージの差異が小さいことがわかる。上の３世代ほどには日本との差異を、また各国間の差異を感じていないということである。逆にこれが大きかったのは「第一戦後・団塊世代」や「新人類世代」であった。

１）日本

「国家イメージ」の成熟性次元については世代間に有意差はなかった。変動性の次元については上の３世代と「新人類ジュニア世代」との間には差があり（$p<.01$）、「新人類ジュニア世代」は、上の世代ほど静態的なイメージを持っていないことが示された。「国民イメージ」は、自己抑制的でやや穏和という評価が最も高かったのは「新人類世代」で、最も低かったのが「新人類ジュニア世代」であった。

２）アメリカ

「国家イメージ」の成熟性の次元は、年齢が上の２世代と下の２世代との間で有意に分かれ（p<.01）、上の世代は下の世代よりも成熟性の評価がより高かった。この傾向は変動性の次元についても同様で、上の２世代の方が下の２世代よりも変動性をより高く評価していた。ただ、この次元では下の２世代間にも有意差があり（p<.001）、「新人類ジュニア世代」の変動性評価は最も低かった。「国民イメージ」の自己統制性の次元では、上の３世代と最も下の「新人類ジュニア世代」で有意に評価が分かれ（p<.01）、「新人類ジュニア世代」は上の３世代ほどには自己解放的とは捉えていなかった。情動性の次元では、最も穏和であると評価した「第一戦後・団塊世代」と他の３世代との間には有意差があり（p<.05）、特にすぐ下の「新人類世代」との差は最も大きく（p<.001）、上の２世代間で評価が大きく分かれた。

３）韓国

「国家イメージ」の成熟性と変動性の両次元ともに上の２世代と下の２世代とで評価がやや分かれ、上の２世代は下の２世代よりも成熟性が高く静態的であると捉える傾向が見られた（いずれも p<.1）。「国民イメージ」の自己統制性の次元では世代間に有意差はなかった。しかし情動性の次元では上の３世代と最も下の「新人類ジュニア世代」との間には有意差があり（p<.01）、特に最も激情的であると評価していた「団塊ジュニア世代」と、すぐ下の「新人類ジュニア世代」との間には大きな差があった（p<.001）。

４）中国

「国家イメージ」の成熟性の次元では、成熟性評価が最も高かった「第一戦後・団塊世代」と最も低かった「団塊ジュニア世代」の間のみ有意差があった（p<.05）。変動性の次元でも、有意差があったのは、静態的との評価が最も高かった「新人類世代」と最も低かった「新人類ジュニア世代」との間のみであった（p<.01）。「国民イメージ」では、韓国の場合と同様に、情動性の次元での評価が最も高かった「団塊ジュニア世代」と最も低かった「新人類ジュニア世代」では有意差があった（p<.001）。ただし自己統制性の次元では、両世代間の差は有意傾向を示したに過ぎなかった（p<.1）。

５）ケニアおよび北朝鮮

ケニアも北朝鮮も、「国家イメージ」は未熟でどちらかと言うと動態的というものであったが、こうした評価が最も高かったのは「新人類世代」あるいは「第一戦後・団塊世代」で、最も低かったのは「新人類ジュニア世代」であった。「新人類ジュニア世代」は、ケニアについても北朝鮮についても成熟性の次元において他の３世代すべてと有意差があった。アフリカ人について、自己解放的で穏和という評価が最も高かったのは「新人類世代」で、最も低かったのは「新人類ジュニア世代」であった。「新人類ジュニア世代」の「アフリカ人」イメージは、アメリカ

人イメージとかなり近いものであった。

図3　世代別「国家イメージ」

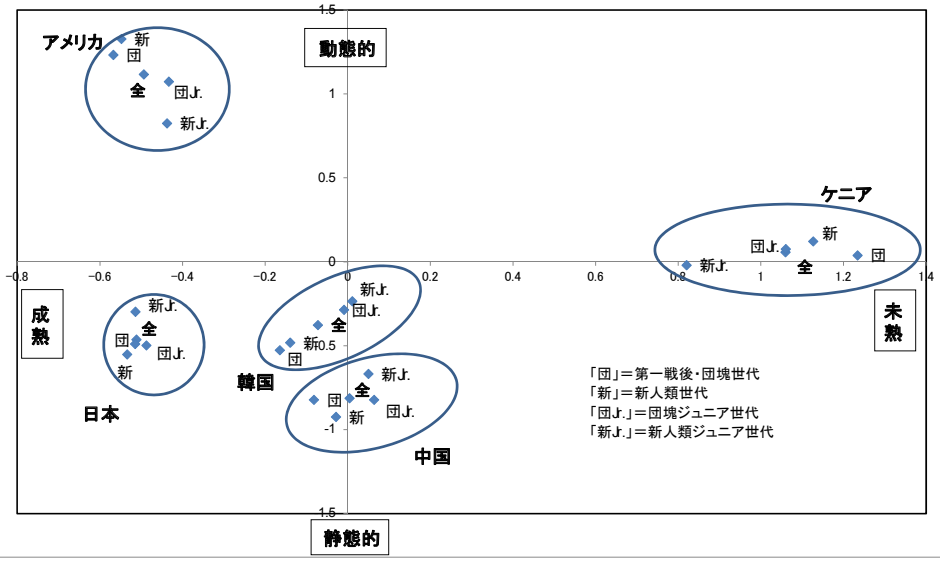
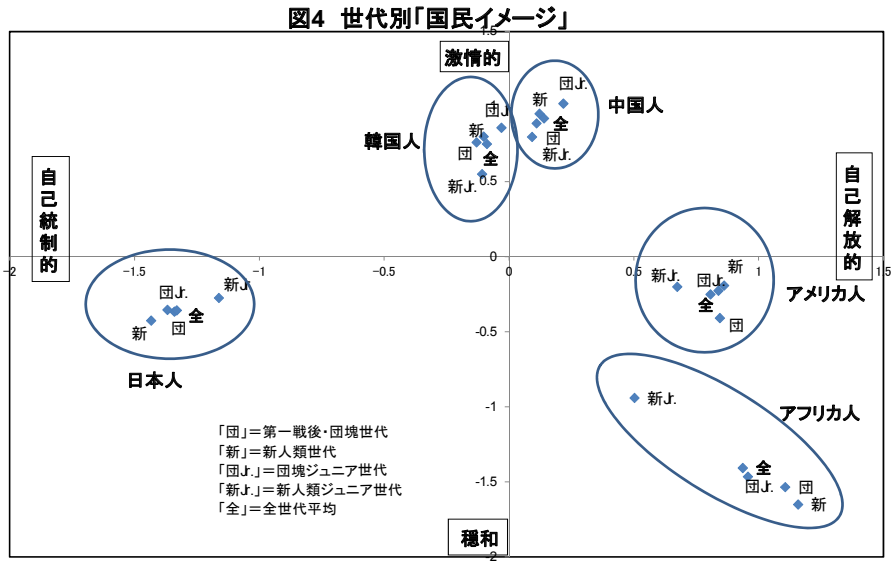


図4　世代別「国民イメージ」



（3）イメージの規定因――重回帰分析（ステップワイズ法）による結果

こうしたイメージがどのような要因によって規定されているのかを探索的に検討するために、イメージを構成する各次元の世代別平均値を従属変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行った。投入した変数は、前節で説明した 19 変数である。説明変数として有意だった要因のみを、「国家イメージ」については表４、「国民イメージ」については表５に示す。

詳細に報告するだけの紙幅がないので主な結果のみを簡潔に述べるが、「国家イメージ」にせよ「国民イメージ」にせよ、全世代に共通してその国に対する好悪の感情がイメージを規定する主要な要因であった。ベータ係数の正負の方向から、その国に対する好意感情があるほど、「国家イメージ」はより成熟的（負）、「国民イメージ」はより自己抑制的（負）で穏和（負）なイメージで捉えており、嫌悪感情はこの逆であるということがわかる。これはつまり、その国に対して好意的であるほど、国の成熟性が高く国民性は自己抑制的でやや穏和という日本人の自己イメージとの類似性が高いイメージを抱く傾向があるということである。では、その日本についての自己イメージを規定している主な要因とは、表に示されたように、どの世代でも「愛国心」であった。「国家イメージ」の成熟性次元と「国民イメージ」の情動性次元では、全世代で有意であり、特に「団塊ジュニア世代」では、日本のナショナル・イメージを構成するすべての次元で有意であった。自国にせよ関係国にせよ、ナショナル・イメージを規定するものは、主に好悪感情や愛国心といった感情的要因であった。

メディア関連変数については、媒体はテレビに限定したものの多くの変数を設定して検討したが、関係がみられたのはそれほど多くはなく、全世代に共通して有意な関係があったのは、北朝鮮の「国家イメージ」の成熟性次元を規定するニュース視聴要因のみであった。「新人類世代」は、他の３世代に比べると有意なメディア関連要因の数が少なかった。

表4　世代別国家イメージ」の規定因

（成熟性次元）

		団塊・第一戦後	新人類	団塊ジュニア	新人類ジュニア
		β	β	β	β
アメリカ	アメリカ好意度	−0.113 *	−0.117 *	−0.104 *	
	アメリカ嫌悪度	0.197 ***		0.114 *	
	中国好意度			0.164 ***	0.143 **
	愛国心	−0.149 **			
	ニュース視聴			−0.203 ***	
	R^2	0.086 ***	0.014 *	0.110 ***	0.021 **
韓国	韓国好意度	−0.108 *			−0.144 **
	韓国嫌悪度	0.247 ***	0.269 ***	0.380 ***	0.402 ***
	中国好意度			0.150 ***	
	中国嫌悪度	0.157 **		0.091 *	
	直接接触経験（欧米人）	−0.121 *		−0.124 **	
	外国関連娯楽番組視聴			−0.114 **	
	テレビ愛着度			−0.087 *	−0.094 *
	R^2	0.140 ***	0.073 ***	0.236 ***	0.228 ***
中国	中国嫌悪度	0.308 ***	0.164 **	0.248 ***	0.317 ***
	韓国好意度				−0.140 **
	韓国嫌悪度		0.103 *		
	直接接触経験（欧米人）			−0.109 *	
	直接接触経験（アジア人）		−0.121 *		
	韓国ドラマ視聴	−0.130 *			
	外国関連娯楽番組視聴			−0.107 *	
	テレビ愛着度				−0.102 *
	R^2	0.111 ***	0.059 ***	0.082 ***	0.144 ***
日本	性別				−0.126 *
	学歴		−0.143 **	−0.096 *	
	アメリカ嫌悪度		0.165 **		
	愛国心	−0.264 ***	−0.198 ***	−0.137 **	−0.194 ***
	米国旧ドラマ再視聴希望	0.127 *			
	外国関連娯楽番組視聴	−0.210 **			
	テレビ愛着度			−0.179 ***	
	R^2	0.102 ***	0.079 ***	0.061 ***	0.056 ***
ケニア	ケニア好意度	−0.128 *			−0.122 *
	アメリカ好意度			0.095 *	
	愛国心				0.117 *
	異文化接触志向			0.097 *	
	ニュース視聴			0.132 **	
	テレビ愛着度		0.110 *		
	R^2	0.016 *	0.012 *	0.040 ***	0.029 **
北朝鮮	性別				0.093 *
	北朝鮮好意度	−0.150 **	−0.119 **		
	北朝鮮嫌悪度	0.227 ***	0.302 ***	0.293 ***	0.321 ***
	韓国嫌悪度		0.121 **	0.146 **	0.118 *
	中国嫌悪度			0.113 *	
	アメリカ好意度			−0.092 *	
	愛国心				0.225 ***
	異文化接触志向			−0.088 *	
	ニュース視聴	0.147 **	0.130 **	0.134 **	0.134 **
	テレビ愛着度				−0.099 *
	R^2	0.100 ***	0.151 ***	0.169 ***	0.265 ***

（変動性次元）

		第一戦後・団塊	新人類	団塊ジュニア	新人類ジュニア
		β	β	β	β
アメリカ	性別			0.138 **	0.134 **
	韓国ドラマ視聴	0.143 **			
	ニュース視聴			0.127 *	0.189 ***
	外国関連娯楽番組視聴	0.125 *		0.144 **	
	R^2	0.043 ***		0.067 ***	0.053 ***
韓国	学歴	−0.138 **			
	韓国嫌悪度			0.108 *	
	アメリカ好意度				0.120 *
	アメリカ嫌悪度	−0.112 *			
	異文化接触志向		−0.124 *		
	韓国ドラマ視聴		−0.138 **		−0.111 *
	米国中期ドラマ再視聴希望			−0.123 **	
	R^2	0.034 **	0.038 ***	0.024 **	0.030 **
中国	中国嫌悪度	0.146 **			0.134 **
	韓国嫌悪度	0.130 *	0.104 *		
	外国関連娯楽番組視聴	−0.139 **			−0.121 *
	R^2	0.060 ***	0.011 *		0.031 **
日本	性別			−0.105 *	−0.165 **
	アメリカ嫌悪度			−0.106 *	
	中国嫌悪度		−0.112 *		
	愛国心			0.094 *	
	米国中期ドラマ再視聴希望			−0.119 *	
	テレビ愛着度				0.127 *
	R^2		0.012 *	0.045 ***	0.044 ***
ケニア	性別		−0.104 *		
	アメリカ嫌悪度				0.127 *
	中国嫌悪度				0.129 *
	異文化接触志向		−0.107 *		
	米国旧ドラマ再視聴希望		−0.138 **		
	韓国ドラマ視聴		0.188 ***		
	R^2		0.054 ***		0.031 **
北朝鮮	性別		0.125 *		
	北朝鮮嫌悪度		0.115 *	0.093 *	0.145 **
	中国好意度		0.116 *		
	アメリカ好意度	−0.144 **			0.115 *
	アメリカ新ドラマ視聴		−0.099 *		
	韓国ドラマ視聴				−0.114 *
	R^2	0.021 **	0.043 **	0.009 *	0.047 ***

:*** p<.001、** p<.01、* p<.05、# p<.1

表5　世代別「国民イメージ」の規定因

（自己統制性次元）

		第一戦後・団塊	新人類	団塊ジュニア	新人類ジュニア
		β	β	β	β
アメリカ人	アメリカ好意度	−0.159 **	−0.151 **	−0.116 *	−0.118 *
	アメリカ嫌悪度				
	中国嫌悪度	−0.123 *			
	愛国心		0.107 *		
	直接接触経験（アジア人）	−0.117 *	−0.133 **	0.138 *	
	直接接触経験（欧米人）			−0.243 ***	
	異文化接触志向	−0.107 *			
	テレビ愛着度			0.113 *	
	R^2	0.069 ***	0.052 ***	0.073 ***	0.014 *
韓国人	性別			−0.121 **	
	韓国好意度	−0.155 **		−0.173 ***	
	韓国嫌悪度	0.213 ***	0.251 ***	0.209 ***	0.242 ***
	アメリカ嫌悪度				−0.097 +
	直接接触経験（アジア人）		−0.099 *		
	異文化接触志向		−0.114 *	−0.107 *	−0.126 *
	外国関連娯楽番組視聴			−0.107 *	
	米国旧ドラマ再視聴希望	−0.104 *			−0.105 *
	R^2	0.087 ***	0.091 ***	0.134 ***	0.106 ***
中国人	性別			−0.110 *	
	学歴		0.123 *		
	中国嫌悪度	0.210 ***	0.215 ***	0.129 **	0.186 ***
	アメリカ好意度	−0.106 *			
	米国中期ドラマ再視聴希望	0.129 *			
	外国関連娯楽番組視聴			−0.107 *	
	テレビ愛着度			−0.124 **	
	R^2	0.069 ***	0.053 ***	0.064 ***	0.034 ***
日本人	性別	−0.132 *		−0.161 **	−0.102 *
	学歴		−0.100 *	−0.179 ***	
	中国嫌悪度				−0.162 **
	愛国心			−0.153 **	−0.269 ***
	直接接触経験（欧米人）			0.100 *	
	外国関連娯楽番組視聴	−0.164 **			
	ニュース視聴			−0.131 **	
	R^2	0.051 ***	0.010 *	0.091 ***	0.113 ***
「アフリカ人」	性別		0.116 *		
	学歴		0.213 ***	0.128 **	
	アメリカ好意度				0.158 **
	直接接触経験（欧米人）			−0.133 **	
	直接接触経験（アジア人）		−0.103 *		
	異文化接触志向			−0.108 *	
	外国関連娯楽番組視聴	0.138 **			
	R^2	0.019 **	0.047 ***	0.042 ***	0.025 **

（自己統制性次元）

		団塊・第一戦後	新人類	団塊ジュニア	新人類ジュニア
		β	β	β	β
アメリカ人	学歴		0.121 *	0.132 **	0.137 **
	アメリカ好意度	−0.116 *			
	アメリカ嫌悪度			0.130 **	
	中国好意度	0.108 *			
	愛国心				−0.106 *
	直接接触経験（欧米人）				
	異文化接触志向			−0.122 **	
	米国新ドラマ視聴	0.117 *			
	テレビ愛着度		−0.116 *		
	R^2	0.037 *	0.032 **	0.050 ***	0.027 **
韓国人	韓国好意度	−0.142 **	−0.105 *	−0.147 **	
	韓国嫌悪度	0.159 **	0.265 ***	0.259 ***	0.266 ***
	中国嫌悪度				0.106 *
	異文化接触志向		−0.127 **	−0.138 **	
	ニュース視聴	0.120 *			
	R^2	0.066 ***	0.112 ***	0.122 ***	0.096 ***
中国人	性別	0.114 *			
	中国嫌悪度	0.199 ***	0.181 ***	0.127 **	0.150 **
	中国好意度				−0.105 *
	アメリカ好意度		−0.116 *		
	愛国心			0.093 *	
	異文化接触志向				−0.137 **
	ニュース視聴	0.109 *			0.180 **
	外国関連娯楽番組視聴				0.135 *
	テレビ愛着度				−0.112 *
	R^2	0.070 ***	0.044 ***	0.029 **	0.117 ***
日本人	中国好意度		0.107 *		
	中国嫌悪度	−0.193 ***		−0.102 *	
	愛国心	−0.203 ***	−0.257 ***	−0.179 ***	−0.254 ***
	R^2	0.082 ***	0.085 ***	0.049 ***	0.065 ***
「アフリカ人」	学歴		−0.157 **	−0.126 **	
	愛国心				−0.167 **
	直接接触経験（欧米人）			0.114 *	
	米国旧ドラマ再視聴希望			−0.100 *	
	ニュース視聴	−0.117 ***			
	外国関連娯楽番組視聴			−0.112 *	
	R^2	0.014 *	0.025 **	0.041 **	0.028 **

:*** p<.001、** p<.01、* p<.05、# p<.1

４．結果のまとめと考察

日本および関係国についてのナショナル・イメージの全体的な構造は、世代に関わりなく類似していた。具体的には、日本のイメージは、国としては成熟性が高くて静態的で、国民は自己抑制的でやや穏和というもので、アメリカは国としては日本と同様に成熟性が高いが、動態性が高く、国民はやや穏和な点が日本人と比較的類似しているが、自己解放的な点が対照的というイメージである。韓国と中国は比較的類似したイメージで、国として成熟性は特に高くも低くもなく静態的、国民は自己統制性という点では特に高くも低くもないが激情的、というも

のである。韓国の方が中国よりも日本とのイメージの差は小さく、特に「国家イメージ」の変動性次元に有意差はなかった。

このような全体的構造は類似していたが、世代による差がなかったのは日本の「国家イメージ」の成熟性のみで、それ以外は有意差が確認された。まず、上の２世代、すなわち「第一戦後・団塊世代」および「新人類世代」と下の２世代、すなわち「団塊ジュニア世代」および「新人類ジュニア世代」との間で、抱くイメージに差が確認されたものがあった。その一つはアメリカの「国家イメージ」で、上２世代が下２世代よりも成熟性と変動性の両次元をより高く評価しており、具体的には「自由な」や「先進的な」といった評価の高さに表れていた（表１参照)。また、韓国の「国家イメージ」の評価についても同様の傾向が見られた。ただし上２世代間にも唯一、アメリカの「国民イメージ」の情動性次元の評価には有意差があり、穏和との評価が４世代中最も高かった「第一戦後・団塊世代」に対し、「新人類世代」の評価は最も低かった。これは具体的な項目では、「新人類世代」は「個人主義」との評価が有意に高く、「人情に厚い」や「あたたかい」「リズム感がよい」などの評価が有意に低いことに表れており、「新人類世代」は合理主義的なアメリカ人イメージを抱いていることが示唆された。

次に、「団塊ジュニア世代」に特に顕著なイメージ項目が確認された。それは、中国と韓国の「国民イメージ」の情動性評価である。いずれも、激情的との評価が４世代中最も高く、具体的な項目では「自己主張が強い」などの評価の高さに表れていた。この４世代中、最も独自の特徴を示していたのが最も下の「新人類ジュニア世代」であり、他の３世代と有意に異なっていたのが、「国家イメージ」ではケニアや北朝鮮の成熟性評価とアメリカの変動性評価、「国民イメージ」ではアメリカ、日本、アフリカの自己統制性次元と韓国の情動性次元であった。すぐ上の「団塊ジュニア世代」とは、特に韓国人と中国人の情動性評価の差が最も大きく、具体的には「自己主張が強い」や「感情的」といった項目の評価の低さに表れていた。図３および図４に示されたように、各国のイメージが全体的に中央に寄っており、それぞれの差異が他の３世代に比べて特に小さい。

こうした世代による差は、戦後 65 年間の日本とこれらの国々との関係の変化と符合する。戦後は専らアメリカとの関係が重要であったが、日本の経済成長とともに、関係のあり方は変化していった。「第一戦後・団塊世代」が青年期を迎えていた頃は、アメリカは「憧れ」であり「目標」であったが、「新人類世代」が青年期の頃には対等なパートナーであろうとして軋轢も経験し、今は重要な関係国の一つである。「団塊ジュニア世代」が青年期を迎えていたこの 20 年の間に関係が密接になったのが韓国や中国で、2000 年代に入ってからはポピュラー文化の面からも交流が盛んになった一方で、領土問題や歴史問題などをきっかけに葛藤も生じている。このように、その世代の青年期に該当する時代の日本と関係国との関係が、各世代が抱く現在のナショナル・イメージにも反映されており、青年期での歴史的事実の共通経験によってまとまりが生じるとする「世代」という概念を用いて検討することの有効性は、確認されたと言ってもよかろう。

では、まさに今、青年期を迎えている「新人類ジュニア世代」の抱くナショナル・イメージには、現在の時代性が反映されていると言えるのだろうか。この世代は特に、他の 3 世代に比べて国家間のイメージの差異が小さいことが特徴として確認された。萩原他（2010）は、この世代の約半数を占める 10 代の若者が何事に対しても関心が乏しいことを調査結果に基づいて報告しており、飽戸・原（2000）は、イメージの差異が明白ではないのは社会的環境に対する関心の低さから来る知識の無さが反映された結果であると述べているが、この世代のイメージ構造の特徴は、こうした社会的環境に対する関心の低さ、知識の無さによるものなのだろうか。国家という社会的カテゴリーを特に意識することなくトランスナショナルな文化を享受しているまさに今の生活経験を反映しているという解釈も可能であり、今後の検討課題である。

青年期の時代性の残滓が反映された各世代の現在の日本および関係国についてのナショナル・イメージを規定する現在の要因についての探索的な検討では、世代を通してその国に対する好悪の感情が主要な規定因であることが示された。その国に対して好意を抱くほど「国家イメージ」はより成熟的、「国民イメージ」はより自己抑制的で穏和となり、嫌悪感情はこの逆であった。関係国についてのナショナル・イメージは、好悪の感情によって変動し、好意的であるほど日本のイメージに近づき、嫌悪するほど日本のイメージから離れるということである。その日本のイメージの主な規程因は「愛国心」であり、全世代で「国家イメージ」の成熟性次元と「国民イメージ」の情動性次元で有意であった。中でも「団塊ジュニア世代」は、両イメージのもう一方の次元でも有意であった。このように、自国にせよ関係国にせよ、ナショナル・イメージを規定する主要な要因は、好悪感情や愛国心といった感情的な要因であることが示された。

メディア関連要因についてはそれほど有意な関係が見られず、全世代に共通して有意な要因であったのは北朝鮮の「国家イメージ」の成熟性次元における「ニュース視聴」であった。隣国で動向に無関心ではいられないが、直接的な接触は極めて限られており、世代を問わずメディアからの情報への依存度が高い場合には、このようにメディア要因が有意な規定因となることが確認された。ニュース視聴頻度が高いほど北朝鮮の「国家イメージ」の成熟性次元の評価が低かったが、これは、北朝鮮の情報を伝えるのはほぼニュースのみであり、それも軍事的な動向か民衆の窮状を伝える内容にほぼ限定されているからであろう。

本研究は、ウェブ調査であるためインターネットと親和性の高い回答者に偏った可能性があること、好悪感情の測定方法が他の変数と異なり負荷が高かったこと、重回帰分析ではモデルの説明力が弱いことなどの限界点はあるが、量的な手法を用いてナショナル・イメージの世代別特徴を明らかにし、イメージの主要な規定因についての示唆を得ることができた。ただし、好悪感情の形成のされ方やイメージの規定のされ方については不明であり、今後の課題である。国広・大坪（2008）はインタビュー調査で、団塊世代の女性が青年期にアメリカ製テレビドラマに表れたアメリカ式のライフスタイルにいかに憧れたかを生き生きと語る様子を報告しているが、各世代に対するこうした質的調査が必要である。量的にも、萩原他（2011）が好悪感情

を規定する要因に旅行経験や直接的不快経験を挙げたように、好悪感情が何に規定されるかの検討を補う必要がある。次なる課題としたい。

【注】

1) 代表以下、所属メンバーは次のとおり。有馬明恵・国広陽子（東京女子大学）、李光鎬（慶應義塾大学）、上瀬由美子（立正大学）、小城英子（聖心女子大学）、志岐裕子（長崎純心大学）、渋谷明子・大坪寛子（慶應義塾大学メディア･コミュニケーション研究所）、藤田結子（明治大学）、村山陽・テー・シャオブン（慶應義塾大学社会学研究科）。

【引用・参考文献】

飽戸弘・原由美子，2000,「相手国イメージはどう形成されているか」『放送研究と調査』8 月号：56-86.

Anderson, B., 1983, *Imagined Communities*, London: Verso.（＝白石さや・白石隆訳、『増補　想像の共同体－ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版 1997）.

ディルタイW.，1875＝2006,「人間、社会、国家に関する諸学の歴史研究」伊藤直樹訳・西村皓・牧野英二編『ディルタイ全集第 1 巻　精神科学序説 I 』法政大学出版局.

李光鎬・萩原滋・テー・シャオブン・上瀬由美子・小城英子・渋谷明子，2010,「外国理解とテレビの役割（4）―外国ドラマの視聴とステレオタイプ」『日本社会心理学会第 51 回大会論文集』: 470-471.

藤田結子，2008,「メディアが構築する外国イメージと若者の国際移動」『メディア・コミュニケーション』58：5-18.

萩原滋・テー・シャオブン・上瀬由美子・小城英子・李光鎬・渋谷明子，2011,「越境する文化とテレビの役割－ウェブ・モニター調査（2010 年 2 月）の報告（1）」『メディア・コミュニケーション』61：75-102.

上瀬由美子，2004,「ワールドカップによる外国イメージの変容―日韓共催によって韓国イメージはどう変わったか」萩原滋・国広陽子編『テレビと外国イメージ』勁草書房：243-259.

上瀬由美子・萩原滋・李光鎬，2010,「北京オリンピック視聴と中国・中国人イメージの変化―大学生のパネル調査から」『メディア・コミュニケーション』60：67-88.

Kelman, H. C., Ed, 1965, *International Behavior: A social psychological approach*, Holt Rinehart.

小城英子・萩原滋・村山陽・大坪寛子・渋谷明子・志岐裕子，2010,「集合的記憶とテレビ―ウェブ・モニター調査（2009 年 2 月）の報告（2）」『メディア・コミュニケーション』60：29-47.

河野啓，2008,「現代日本の世代－その析出と特質」NHK 放送文化研究所編『現代社会とメディア・家族・世代』新曜社：14-38.

河野啓，2010,「現代日本の世代と意識変化」NHK 放送文化研究所編『現代日本人の意識構造』日本放送出版協会：207-227.

国広陽子・大坪寛子，2009,「テレビとは何だったか－記憶される娯楽としてのテレビ」『武蔵メディアと社会研究会 2008 年度研究プロジェクト成果報告書』.

御堂岡潔，1990,「文化集団のイメージーマス・レベルにおける文化理解」『社会心理学パースペクティブ３』誠心書房：275-285.

向田久美子・坂元章・村田光二・高木栄作，2001,「アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化」『社会心理学研究』16（3）：159-169.

向田久美子・村田光二・稲葉哲郎・佐久間勲・樋口収・高林久美子，2005,「アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ（4）―類似性認知の変化とメディア接触の影響」『日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集』：612-613.

向田久美子・坂元章・高木栄作・村田光二，2007,「オリンピック報道は外国人・日本人イメージにどのような影響を与えてきたか―シドニー・オリンピックを中心に」『人間文化創生科学論叢（お茶の水女子大学）』10：297-307.

向田久美子・斉藤慎一・李津娥・有馬明恵・日吉昭彦，2008,「日韓イメージとメディア（3）―メディア接触と韓国人・日本人イメージの関連」『日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集』：592-593.

村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・樋口収・高林久美子，2005,「アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ（1）―愛国心、ナショナリズム尺度の検討」『日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集』：64-65.

大坪寛子，2004,「番組の視聴効果とその持続性」萩原滋・国広陽子編『テレビと外国イメージ』勁草書房：122-144.

Sakamoto,A., Murata, K., and Takaki,E., 1999, “The Barcelona Olympics and the perception of foreign nations: A panel study of Japanese university students”, *Journal of Sport Behavior*, 22, 260-278.

渋谷明子・テー・シャオブン・李光鎬・上瀬由美子・萩原滋・小城英子，2011,「メディア接触と異文化経験と外国・外国人イメージ―ウェブ・モニター調査（2010 年 2 月）の報告（2）」『メディア・コミュニケーション』61：103-125.

Tajfel, H. and Turner, J. C., 1979, “An integrative theory of intergroup conflict”, In W. G. Austin and S. Worchel, Eds., *The social psychology of intergroup relations*, Montery, CA: Brooks/cole, 33-47.

Tajfel, H. and Wilkes, A. L., 1963, “Classification and quantitative judgment”, *British Journal of Psychology*, 54, 101-114.

Tajfel, H., Billing, M. G., Bundy R. P. and Flament, C., 1971, “Social categorization and intergroup behavior”, *European Journal of Social Psychology*, 1, 149-178.

我妻洋・米山俊直，1967,『偏見の構造：日本人の人種観』日本放送出版協会.

綿貫譲治，1994,「「出生コーホート」と日本有権者」『レヴァイアサン』木鐸社 15：53-72.

（おおつぼ　ひろこ　慶應義塾大学メディアコミュニケーション研究所）